

## 『輝き続けたS君』

人は何か困難にぶつかった時に、心のよりどころになるものが一つでもあれば、それを通じて乗り越えるきっかけを見出せるかもしれない。それは、人によっては家族であったり、友人であったり、或いは宗教であったりするのだろう。今日は、大学病院時代に出会ったS君のことを振り返ってみたいと思う。

1992年3月にS君は私のいる血液内科に入院した。2年前より急性骨髄性白血病を患い、他の病院で繰り返し強力な抗がん剤治療を受けながら、2回目の再発を来たしてしまったのだ。24歳という若さながら、長い治療の疲れか、それとも再発によるものなのか、その時の彼は精気も無くふさがちであった。心配そうに付き添った母親が彼の気持ちを代弁するかのようになり、涙ながらに色々と言ってきた経過を話してくれた。

2回目の再発ともなると、状況は非常に厳しく、通常は骨髄移植という選択をするところであったが、残念ながら彼は白血球の型（HLA）の合う提供者に恵まれず、その道は断たれていた。まだ骨髄バンクも軌道に乗っていない時代である。

我々医療スタッフは、もう一つの選択肢として自家骨髄移植という治療方法を提示した。これは、まず抗がん剤治療によって白血病細胞をほぼ死滅した状態（寛解状態）に持っていき、その時点で本人の骨髄細胞を採取し、凍結保存しておく。その後は通常の骨髄移植と同様に超大量の抗がん剤を投与して、さらに白血病細胞を根こそぎ死滅させ、その上で凍結しておいた自分の正常（であろう）骨髄細胞を戻す、という荒治療である。



この治療がとても厳しく、そのために命を落とす可能性もあったとはいえ、『できる限りの事をしてあげたい』という両親の強い意思により、答えは決まった。

まず第一段階として抗がん剤治療を行い、予定通り、3回目の寛解状態に入ることに成功した。6月に入り、全身麻酔をかけて、手術室で骨髄採取を行った。十分な骨髄細胞を採取することができ、凍結保存した。あとは彼の体力の回復を待って、自家骨髄移植に挑むだけである。

両親の意向により、彼には『病名は、“再生不良性貧血”という血液を造る能力が損なわれた病気であり、骨髄移植によって、いい状態に持っていくことができる』と説明した。彼の目は両親とともに希望に満ちていた。

ある時、骨髄移植まで少し時間があることから、S君から『どうしても治療前に行きたい所があるんです』と申し出があった。遠方であり、両親も心配そうであったが、ひょっとするとラストチャンスかもしれないということもあり、大事な治療前とは言え、両親も私もそれを許可した。

数日後、病院に帰ってきたS君は、とても輝いた表情を我々に見せてくれた。彼は、当時何かと話題になっていたある宗教を信仰し、その集会に出席し、リーダー（教祖）の講演を聞いてきたのである。とても嬉しそうに、そのことを一生懸命、私に話してくれた。両手を広げながら、『だって、先生。お話を聞いていたら、この手のひらから、どんどん金粉が湧き出てくるんですよ。素晴らしいでしょう。』と大きな声で言った。正直、そのことは信じがたい出来事であったが、私は彼の輝いた目に圧倒されていた。本当にさわやかな、曇りの無い、輝きのある目、そして表情であった。

7月16日、予定通り、自家骨髄移植を施行した。治療は予想通り、厳しいものであった。次々に色々な問題が生じた。まず移植3日目にして心臓に水がたまり、危険な状態となってしまったため、無菌室で外科医により、緊急で水を抜く小手術を行った。手術後も不整脈が続き、予断を許さない日々



が続いた。私は目覚まし時計の音が心電図モニターの警告音と思い、びっくりして目覚めるくらい、自宅にいても緊張感でいっぱいであった。心臓の方が落ち着いてまもなく、今度は肝臓が急激に腫れ出し、それが重篤な合併症によるものを知る。致死率の高い合併症ではあったが、これも何とか治療により乗り切った。

ある日の夜間、不安でいっぱいの彼と無菌室で色々話をした。私は『この部屋を出てからのことを一緒に考えよう』と提案した。少しでも気が紛れて欲しかった。彼は『退院したら、また素晴らしいお話を聞きにいくんだ。そして、何か自分もそれに関わる活動をしたい。』といった夢を話してくれた。

数々の合併症を乗り越え、移植後3ヶ月目ようやく退院することとなったS君は、少しずつ元気を取り戻し、外来受診のたびに、あのさわやかな笑顔を見せてくれた。集会でプラカードを持って行進した時の写真が会報に載っており、嬉しそうに見せてくれた。この時の笑顔は24歳そのものであった。

移植後、約2年半を経過した後、残念ながらS君の白血病は再発してしまい、26歳という若さで天国に旅立った。彼は最後まで真実を知ることは無かったが、いつも輝いて見えた。彼が信じていたその宗教は夢と希望をもたらし、しっかりと彼を支えてくれた。そして、短い人生だったけど、彼はそれを心のよりどころとして、誰よりも一生懸命生きぬいたのだと思う。